

コーラス
と
オーケストラ
の
タベ

合唱団
鯨



268.7.17

合唱団鯨サマーコンサート

♪ コーラスとオーケストラの夕べ ♪

指揮 芥川也寸志

コーラス 合唱団 鯨
オーケストラ 新交響楽団
ピアノ 渡部令子

I コーラスのステージ

ロンドンデリーの歌……イギリス民謡
歌のつばさに……メンデルスゾーン
誰も知らない悲しさ……チャイコフスキー
ラ・クカラチャ……メキシコ民謡
汝を愛す……グリーク

II オーケストラのステージ

喜歌劇《こうもり》序曲……J. シュトラウス
バレエ組曲《眠れる森の美女》……チャイコフスキー
交響組曲《ミシシッピー》……グロフエ

III コーラスとオーケストラのステージ

歌劇《タンホイザー》より“巖かのこの広敷”……ワグナー
オラトリオ《四季》より“春よ来い”……ハイドン
歌劇《トロヴァトーレ》より“アンヴィルコーラス”……ヴェルディ
歌劇《アイーダ》より“凱旋の場の合唱”……ヴェルディ
オラトリオ《メサイヤ》より“ハレルヤコーラス”……ヘンデル

と き

1969年7月17日(木)午後7時開演

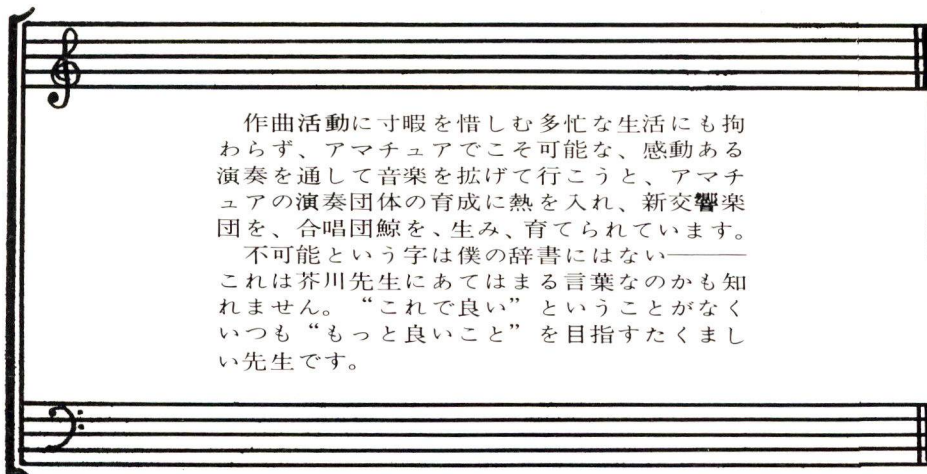
ところ

渋谷公会堂



今宵の出演者

指揮 芥川也寸志



オーケストラ
新交響楽団

音楽を演奏する喜びや楽しみを、他の多くの人々と分かち合い、音楽に親しむ人々がふえていくことを理想として、許される限り多く演奏会を開こうとするアマチュアオーケストラです。創立14年を数え、創立当時の常任指揮者、芥川先生を中心に、一昨年はソビエトに演奏旅行し、今秋は沖縄～西日本にかけて演奏旅行しようとする意欲的なオーケストラです。

ピアノ
渡部令子

“鯨”はね、何でも最高でなければいけないんだよ——これは芥川先生の口ぐせです。

その“鯨”の誇り得る最高のものに渡部先生のピアノの腕まえがあります。どんなに複雑なオーケストラ用の楽譜にも、また、芥川先生の独得なニュアンスの指揮棒にもビクともしない頼もしい先生、“鯨”誕生以来の誇り得る素敵なパートナーです。

コーラス
合唱団鯨

ボクは昨年の1月に生まれました。厳しいパパとやさしいママに育てられ、ぐんぐん大きくなったボクは“こわいもの知らず”で、定期演奏会、テレビ出演、依頼演奏会出演などいろんなことをやって来ました。

だけど、この頃パパは、“やりたいこと” “やれること” やらなければいけないこと”をよく考えるように、と言っているような気がするんです。

ロンドンデリーの歌

ロンドンデリーとはアイルランドの北西部にある地方の名前のことです。古くから民謡としてあったものを、オーストリアのピアニスト、パーシー・グレンジャーが紹介してから、世界的に有名になりました。「ダニー・ボーイ」という別名を聞いて、ああ、あの歌か、と言う人も居ると思います。遠い所に居る愛しい我が子に寄せる母の歌です。古今東西を通じて、最も純粋な愛は、母の子に与える愛情ではないでしょうか。でも、今日私達が歌う歌詞は、恋人を思う歌になっています。

歌のつばさに

御存知メンデルスゾーンの代表的歌曲です。ハイネの詩は、恋の理想郷を歌ったもので、ガンジス河という地名が出て来ます。仏教では、よく西方浄土と言って、西の方、つまり私達アジアから見れば、ヨーロッパの方に極楽があると、考えられていました。これと反対に、キリスト教のヨーロッパでは、東の方に行けば、素晴らしいユートピアがあると孝えられていました。夢多き青年ハイネも、きっと、東洋のガンジス河の辺りに、素晴らしい桃源郷を思い描いていたのでしょう。

チャイコフスキーと言えば、誰でも交響曲とか、協奏曲とか、バレエ組曲は知っていますが、百三十も歌曲を創っているということを、知っている人は余り居ないのではないですか。「誰も知らない悲しさ」は、その中の一曲で、ゲーテの「ウイヘルム・マイスターの修業時代」の中にある詩に作曲したものです。二十九歳頃の作品ながら、内省的な深みのある曲になっています。チャイコフスキーはこの曲に寄せて、ふと感じるたまらない寂寥感を表わしたかったのかも知れません。

ラ・クカラチャ

日本語で言うと「アブラ虫」という所でしょうか。日本語の歌詞は、アブラ虫とはまるで関係ありませんが、三拍子のリズムとメロディーだけを聞いていると、不思議にあのアブラ虫が、台所を這い回っている姿が浮かん

で来ます。但し、日本の湿った板の間にうごめくものではなく、メキシコの乾いた石の上を動き回る、今にも踊り出しかねない、陽気なアブラ虫です。この歌に代表されるように、メキシコの民謡には、シェリト・リンドなど、明るく活発な歌が沢山あります。

グリークが未だ二十歳を一つか二つ越えた頃に作曲されたこの曲は、こまやかな抒情性では、世界一と言っても過言ではないでしょう。その頃婚約したニーナという女性のために、グリークは、アンデルセンの詩に、この甘美なメロディーを付けた訳です。このような愛の曲を捧げられた女性は、何と果報者でしょう。“私はあなたを愛します、地上のなによりも。私はあなたを愛します、神の命に背いても。…”この世に男と女のいる限り、愛し合い・憎しみ合いながら人は生きるのです。

君を愛す

「私達の野原よ」という意味のこの歌を、ロシア民謡として、聞いたり、口遊んだりした人も少なくないと思います。クニッペルというソ連の人が作ったこの曲は、戦争に向かう若者達を描いた歌です。この曲が、国民に広く愛唱されるようになったのは、第二次世界大戦からでした。作曲者があっても、民謡と呼ばれるのは、フォスター作曲のアメリカ民謡に依っても理解出来ます。民謡といえば、フランスの国歌、「ラ・マルセイエーズ」などは、民謡の親玉と言うべきでしょう。

オペレッタ「こうもり」は、1873年に、ワルツ王と呼ばれるヨハン・シュトラウスが作曲しました。ヨハンシュトラウスといっても、父と子が同姓同名なので、私達は区別するのに困るのですが、父の方は、ワルツの父と呼ばれ、子はワルツ王と呼ばれています。有名な曲を数多く残しているのは子の方です。普通、二代目というものは、一代目には到底及ばないものですが、シュトラウスの場合反対で、息子の如何に優れていたかが分かります。序曲は、劇中の旋律をメドレー風に紹介して、充分に効果を上げています。

こうもり序曲

誰も知らない悲しさ

眠れる森の美女

フランスの文豪シャルル・ペローの童話を原作としているこのバレエ組曲は、チャイコフスキー四十九歳の年に完成しました。物語は、美しい王女が、魔女の呪いによって十六の時眠ってしまうが、偶々通り掛かった王子の接吻により呪いが解け、王女と王子は結ばれるという筋です。中に出て来る魔女ですが、不思議と魔男という言葉は聞きません。他にも、妖女とは言いますが、妖男とは言いません。大体「妖」という字は女偏です。洋の東西を問わず、女性執念が深いようです。

組曲「大峡谷」の作曲者グローフェの作品です。グローフェは、ニューヨークで生まれ、十年間ロスアンゼルス交響楽団でヴィオラを弾いていましたが、十八歳の時、ポール・ホワイトマン楽団に、ピアニスト兼編曲者として入りました。それから四年後、ガーシュインの「ラブソディー・イン・ブルー」初演に際し、そのオーケストレーションで有名になったのです。グローフェでもガーシュインでも、アメリカの作曲者は、所謂クラシックに、ジャズをどんどん取り入れています。

厳かのこの広敷

ワーグナーは、オペラ「タンホイザー」を1845年に完成しました。「厳かのこの広敷」は、その中の歌合戦の場で、騎士達が入場しながら歌う合唱です。このオペラは、歌合戦の伝説とタンホイザーの伝説とに拠っています。騎士タンホイザーの愛の苦悩を描いた物語で、結局犠牲によって救われる、となっています。小林秀雄氏は、ワーグナーの音楽に、「エロティック」という表現を用いていましたが、この言葉は、ワーグナーの音楽の一面を捕えていると、言えないでしょうか。

春よ来い

この歌は、ハイドンのオラトリオ「四季」の中の二番目の曲で、春の訪れを待つ歌です。聴いた人も居ると思いますが、私達合唱団「鯨」は、去る五月二十八日、ハイドン「四季」全曲を、総て日本語、パントマイム入りとい

う、世界史上初の試みをもって、公演しました。幸いその公演は、好評の中に終わりましたが、今日は「四季」の中でも一番知られている曲を歌います。将来は、ヘンデルの「救世主」、ハイドンの「天地創造」も新鮮な方法で公演します。どうぞ御期待下さい。

アンヴィル・コーラス

ヴェルディの歌劇「トロヴァトーレ」第二幕冒頭の合唱が、アンヴィル・コーラスです。ジプシー達が朝の仕事をしながら歌いますが、とても爽やかな曲です。歌劇の方ですが、トロヴァトーレとは、中世の吟遊詩人のことで、この吟遊詩人が主人公となります。伯爵に母を殺されたジプシー女は、復讐のため、伯爵の息子を誘拐します。時がたつて誘拐した子の兄が伯爵になります。伯爵と、本当はその弟の吟遊詩人が一人の女性を争い、ついにはそれと知らずに兄が弟を殺してしまいます。

これもヴェルディの歌劇、「アイーダ」の中の曲です。「アイーダ」は、1869年のスエズ運河完成を記念して、カイロに建てられた歌劇場のために作られたオペラです。「凱旋の場の合唱」は、行進曲と共にエジプト軍が凱旋する時に歌われる曲で、実に壮大なものです。「アイーダ」は儘にならぬ恋の悲劇ですが、矢張悲劇は、「ロミオとジュリエット」に代表されるように、様々な制約と誤解の上に成り立つようで、現代に悲劇が成立しにくい理由も、ここいら辺にあるようです。

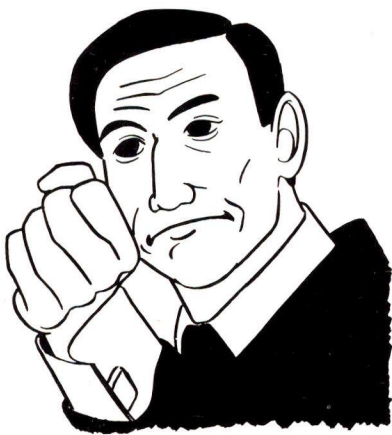
凱旋の場の合唱

ハレルヤ・コーラス

オラトリオとは、日本語では聖譚曲となります。簡単に言えば舞台装置とか動きのないオペラです。但し、内容がキリスト教から取ってあるので、オペラより抹香臭く、つまらないかも知れません。しかしスケールは雄大で、独唱、合唱、管弦楽が一体となった時は、圧倒的な迫力があります。ヘンデルは、このオラトリオを五つ創りました。中で特に有名なのが「救世主」です。ハレルヤ・コーラスは、「救世主」第二部の最後の曲で、初演の時この曲に入ると、国王が思わず立ち上がったので、全員起立して聞いたという位の曲です。

鯨の歌

常任指揮者 芥川也寸志先生



《やさしさ》

これはナイショの話ですが、ステージの幕が上がる前に、先生はよくこんなことをおっしゃいます。

「ステージの上でのことは、全部僕の責任なんだよ。せっかくいままで一生懸命練習してきたのに、緊張のあまり声が出なくなったらつまらないよね。わからなくなったら、ポッポッポでもいいから、とにかく歌ってよね」

さりげないいたわりを感じる時、私たちは力づけられ、そのひとことで緊張がほぐされて、伸び伸びと歌えるようになるのです。

これは残念ながら私たち団員が創り出している魅力ではありません。

現在は、芥川先生をはじめ私たち“鯨”の団員を指導してくださる先生方の魅力で支えられているものだと思います。

でも、私たち“鯨”の団員はドンヨクです。いまは先生方の魅力で支えられているとしても、そのうちに、きっと私たち“鯨”の団員自身の魅力でどなたからも愛される合唱団になるつもりでいます。

そこで、先生方の一面をちょっとご紹介いたしましょう。

《きびしさ》

「練習場に来たらね、みんな音楽家なんだよ」「自分の限界の中でしか考えられないなんてつまらないじゃないか。挑戦するんだよ。」

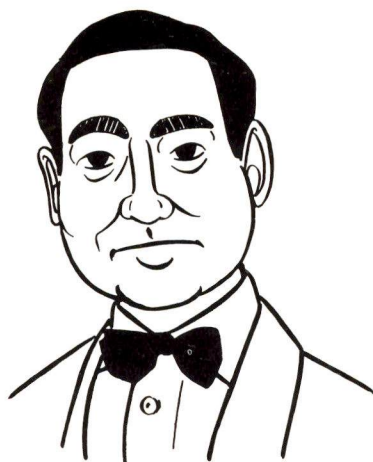
先生は作曲家、私たちは音楽以外の職業に従事している、音楽に関しては素人です。そこで、ともすればアマチュアなのだから——と甘えたくもなりますが、“鯨”の団員である限り、先生は私たちを“音楽家”として扱われます。時には、とても重荷になりますが、先生の出される音楽的要求に応えられるようになること——それが私たち“鯨”に課せられている使命であり先生の信頼に応える唯一の方法だと思っています。

《あまさ》

「ずうっと昔のことだけどね、娘が生まれた頃吉祥寺の方に住んでいたんだよ。その頃は配達なんかなくてね、新宿のデパートまで自転車でペビ一用品を買いに行って、一生懸命帰って来てね、玄関に立とうとしたらどうしても立てないんだよ。足がヘタヘタしちゃってね。」

練習の時には、音程に、ことばに、リズムにと口うるさく(?)注意される先生にも子供には目がない、という意外な面があるようです。





《きびしさ》

ヴォイストレーナー兼副指揮者として鯨と喜怒哀楽をともしにくださっています。

ご自分で模範として声を出される時、また一生懸命に指揮をしてくださる時は、眉を吊り上げ、目を大きく見開き、顔全体で、というより身体全体で音楽にぶつかっていかれます。

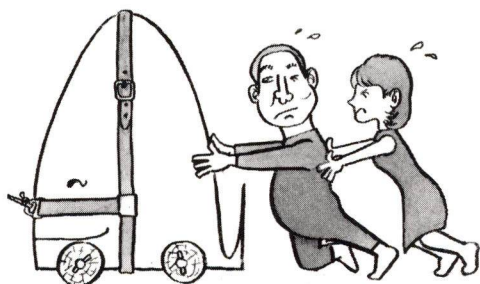
《たくましさ》

小柄な身体と、あどけない表情とに似合わず強力なバイタリティーの持ち主です。芥川先生にどなられながら、何度も同じメロディーの練習をする私たちのために、嫌な顔もせず忍耐強く何度でもくり返し弾いてくださり、無言のうちに私たちを励ましてくださいます。

《きびしさとやさしさ》

時には発声や合唱練習をご指導いただくこともあります、その時は大変です。いい加減な妥協をせず、「カッコよくうたおうと思っているから駄目なのよ。」「もっと工夫して声を出してね、そのカンを覚えてるのよ。」と手きびしい練習がくり返されます。

けれども手きびしい練習にも拘らず、ご指導くださる先生というより、「団員同士」と呼べるような親しみ易い雰囲気を持つ素敵な女性です。



カット(中山)

“うたをうたう”ということが、喉ばかりでなく、身体全体の筋肉を使うことだ、ということを、私たちは村本先生に身をもってご指導いただきました。

《やさしさ》

寄らば大樹のかげ——まさしくその言葉通りで、先生は頼り甲斐のあるガッシリした身体つきをしていらっしゃいます。もちろん声も大きく、練習場のビル全体が共鳴するかの如く張りのある、よく響く声を持っていらっしゃいますが、その豪快な感じに似つかず、とてもこまやかな神経の持ち主です。

“鯨”の仲間がハイキングに出かけた時のこと。その近くに住んでいらっしゃる先生は、お子さまの手をひき、ブラリと姿を見せてくださいました。

単に合唱団 鯨の副指揮者としてのみならず、コーラスを離れても、私たちを心にかけてくださるやさしい先生です。

ピアノ 渡部令子先生



気どらず、むしろベランメエ的にすら聞こえる話し方でご指導くださるため、私たちは気が楽になり、笑いこけながらもモーレツにしごかれてしまう、という結果になります。

演奏会にあたって

合唱団 鯨 委員長 八星礼一

合唱団の楽しみは山登りに似ていると思われます。苦しんで苦しみ抜いた後に味わうわずかな喜びその喜びを求めて、又苦しむ。

しかし山登りと違う所は楽しみを感じるのが本人だけでなく、演奏会と言う形で聞いて下さる人達と共に感じる点です。私達現代人の多くは、今の自分は本当の自分ではない本当の自分はどこかにあって、自分はまだそれに会えないでいる。だから自分は毎日少しずつ死んでいるんだと感じております。唱う方も、又聞く側も、たとえ瞬間的であっても、自分に会えたと感じる場所、あるいは“本当に自分は今生きているんだ！”と感じるような、そんな鯨の演奏会でありたいと思って居ります。しかし私達の技術はそうなるにはまだまだあまりにも未熟です。でもいつの日にかそんな演奏会が出来るように、これからも唱いつづけていくつもりです。

今日このサマーコンサートにおいて下さいましたことを心から感謝いたします。今後とも合唱団鯨を暖い目で見守って下さるようお願い申し上げます。

つぎの演奏会

日 時 : 12月21日(日) PM 7:00
会 場 : 厚生年金会館大ホール
曲 目 : メサイヤ
オーケストラ : 新交響楽団
合 唱 : 合唱団鯨
指 揮 : 芥川也寸志

団員募集

指 揮 : 芥川也寸志
練習日時 : 毎週火曜 15時 ~ 17時
練習場 : カワイ楽器渋谷 ショップミュージックサロン
(国電渋谷駅北 口下車徒歩5分)
会費 1ヶ月 300 円

共演にあたって

新交響楽団委員長 戸田昌広

消費生活華やかなこの社会にあって、何か与えられたものを享受するのではなく自ら作り出す姿勢を持つ演奏団体が、その成果を問う演奏会にける情熱は並々ならぬものであります。

この日に私たちの気持が音楽をとおして客席へ伝わり暖かい空気が返って交流しあえたら、日頃の苦勞など忘れて音楽する事の喜びを共に味えるものと思います。

仕事や勉強のかたわらに音楽に接しられることが私たちにとっては喜び楽しみであります。ただそれだけにとどまることなく、更に良い音楽を作り我々アマチュアでなくては出来ないことをやり、この体験を他の人々にも伝えひろめて同じ仲間がふえることを望んでおります。

面白い名前の合唱団 鯨 との共演は昨年末の第九公演に次いで二度目ですが、発足して二年足らずにして今日のような大所帯になりその圧倒的な団員とボリュームで押しまわれ、つぶされそうに感じるので新響もこの鯨に対抗してせめて名前だけでも“ゴジラ”とでも変えて頑張りたいと考えているところです。

新響と鯨はオーケストラと合唱団という違いはありますが、同じ目的意識を持つ団体であり、それぞれの持ち味を生かして今後とも協力しあって活発な音楽活動を行いたいと考えます。

後援会募集

お問合せは : 鯨事務所までご連絡ください。
〒150 渋谷区代官山10 30号館253号室
八星礼一内合唱団鯨



新響・鯨 第九特別演奏会のステージ

カルチュア交響詩

第一章 “誕生の歌”

都会の中に埋没して生きる個々の者達が、1967年、師走のイヴの日に何らかの意志と明確な情熱を持って集まった時、その内に秘めていたものは、音楽を愛する想いだけではなかった。

数多くあるアマチュア合唱団の中で、どのような合唱団が存在しなければならないのか、ここに誕生する“合唱団鯨”の母体となるべきものは“新しいイメージを創造し、追求してゆく場でなければならない”という確信であった。音楽が特定の人のものである時代はすぎさりつつある。しかし、歌うことの楽しさを誰もが楽しみ、その喜びを、誰もが必要とするには、良い音楽を歌いつづけ、合唱する者の喜びや充実感が、客席にまで伝え拡がる演奏のできる合唱団でなければならない。

“鯨”誕生の日から現在まで、合唱団の精神的、その他のささえになっているのは、もちろん指揮者の芥川也寸志先生である。先生のアマチュア合唱団に寄せる強い情熱と新鮮なイメージを押し進めてゆくことは、先生自身にとっても、団員にとっても、忍耐と多くの労力を必要とするものである。

「個人の趣味的な満足感のわくから一步進んで、合唱する者が辛いことや、耐えなければならないものを乗り越えて得た、苦しみの中の喜びや、幸せや、感激が聴衆に深い感銘を与える」という理念がこの合唱団の生命になり、精神的な、共通の財産となっている。

第2楽章 “不協和音”

“君達の趣味や道楽のつきあいをするつもりは全然ない。その程度に“鯨”を考えているなら僕はいつでもおりるよ”

芥川先生がよく話される言葉ですが、実際鯨の主旨を完全に把握している団員は少く、鯨の大きな悩みの一つです。

“合唱団鯨”の目標は一部の人の為の芸術ではなく、全ての人々の為の芸術を創造してゆくことであり、演奏会やその他色々な活動を通して単なるアマチュアの合唱団としてではなく、物理的にも精神的にも何らかの形で日本の社会に深い感銘と影響を与える活動団体でなければなりません。

この理想を達成する為にはアマチュアに甘受することなく、音楽に対する純粋な熱意と各個人の可能性を、どこまでも追求して行く時のみ得られるものです。発足して1年半の鯨では単に歌を楽しむとか、指揮者の魅力で在団している人達が多く、文化的活動団体としての意義を認めて在団している人はアンケートの結果でも全体の半数弱なのです。文化活動体とは固定した思想や理念に基づくものでなく広い意味で日本文化の発展に貢献することで、発足したばかりの“鯨”ではこのイメージを理解しきれないのは当然かも知れませんが徐々に団員一人一人が独自の解釈でその意義を把握する必要があります。

“鯨”には家庭の主婦、先生、サラリーマン、OL、自家営業、学生と職業層も広く、年齢も18才から60才を越える初老まであらゆる人達の集まりなので、その為に起る不協和音的なものもかなりあります。主婦は家庭と鯨の板ばさみ、サラリーマンやOLも会社と家庭と鯨の両立、学生も学校とアルバイトと鯨の両立と皆二足も三足ものわらじを履いています。もちろんアマチュアである以上これらの悩みは当然起ることでありますが、この問題は互に他人を理解し合い解決してゆかねばなりません。芥川先生も「仕事を犠牲にしてまで鯨に邁進することは、かえってありがた迷惑だ」と言われます。

ほかに鯨の大きな悩みの一つで男声不足があります。現在男声は全体の2割5分ほどしかいま

せん。日本を代表する名演奏を聴かせ聴衆にかぎらない喜びと感動を与える音楽団体になることを目標にしている鯨では、男声がもっともっと集ってくれなければならない、委員会もファイトある男性獲得に一生懸命なのですが、思うように男性が集まりません。日本の社会情勢下では男性が合唱、その他の特技に打込める時間的余裕の少ないことは事実です。だれでも参加でき、しかも音楽的に素晴らしい演奏を聴かせることは不可能なことでしょうか、それは各自の自覚である程度可能になるのではないのか。

鯨の不協和音はどれをとりあげても満足に解決されていませんが、全員が前向きの姿勢で努力していることは事実です。

第3 楽章 “秘められたハーモニー”

“美しいハーモニー” それは聴衆、演奏者、指揮者が三位一体となって作り出して行かねば生まれません。

美しいハーモニーを追求して行く過程には数限りない喜怒哀楽が生まれます。

“ソプラノ音が低い！ 男声もっと男らしく！ みんな感情が全然ない！ 前の一列だけで歌って！ その次の列！” 等と色々な注意や要求がしきりなしにとぶ。アマチュアだからといって安易に妥協しない先生“ここに来たらみんな音楽家なんだよ”と団員を信頼して下さる先生を見ると、どんな要求にも答えよう、しいては自分のためだと思ふ時、体中に漲るファイトが湧いてきます。逆に音楽に対する技術のなさ、理解のなさ、力のなさを感じる時の哀しみ、要求に応えられないときに感じる自分自身への怒り、大曲を暗譜で歌いこなせたときの喜びなど言葉では表わすことのできないハーモニーが生まれます。つい最近、ハイドンの“四季”を演奏した時のことです。

日本語訳（合唱団鯨訳）にしようと、いきごみも勇ましく作業にとりかかった。未経験の団員で進めていくうちに、どうしても“音譜に言葉が合わなかったり”“ニュアンスが悪い”等、あしたものか、こうしたものかと、先生を中心に頭をかかえこみ、明け方を迎えることも幾度かあった。その努力が実って新しい“四季”を演奏することができた。ほかにも単なる“歌う”以外に活動し

ている人達が多い。鯨の毎週発行されるニュースを作成する人、演奏会場や臨時練習会場を捜す人、若い団員のコミュニケーションを中心に活動している“ヤング鯨”、演奏会のプログラムやチケットを作成する人等、委員会を中心に幅広く活動しています。

このように多くの人達が労苦をいとわないのは、鯨に対する愛着であり、それらは必ず素晴らしいハーモニーを生むと確信しているからです。

演奏するまでには個人的な悩み、苦しみがあります。その中で団員が一つのものを作りあげ、それが心をゆり動かすハーモニーになった時“秘められたハーモニー”はきっと喜びのハーモニーに変ることでしょう。

第4 楽章 “未来への楽章”

“プロ”ではだすことの出来ない音“アマ”でしかだせない素晴らしい音、それは必ずあります。“音楽”という雲の上まで続く無限に大きなアルプスを一步一步登りつめて行く姿は必ず聴衆に解ってもらえる。

鯨がこれから歩む道は、ひたむきな音楽への情熱であり、限らない可能性への挑戦であります。我々の一つ一つの努力はいつの日か報いられることでしょう。

あたたかい気持で鯨の演奏会を聴いて下さる人達や無報酬で鯨を指導して下さる芥川先生、音楽を愛する全ての人達のためにも、自分自身のためにも着実に努力して行かなければなりません。世の中の先駆者になるのも、捨て石となってつまづくのも宿命である。それを怖れず限らない可能性を合唱団鯨は求め続ける。

国内はもちろん、海外の演奏旅行もきっといつの日かは、必ず……………。

曲 目

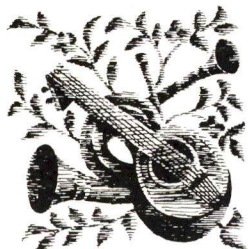
第二部

入場券 A 500円 B 400円 自由席 250円

編集後記

子
子人佐一子子作利子
稔節卓比洋常紀新由史
橋部倉崎畑木村山田木
板阿板岡川鈴中中藤村
へんしゅういん

新刊のご案内



* 有名楽器店にて発売中・品切れの節は発行所にお申込下さい……………

●近刊—MISSA BREVIS<PALESTRINA> MESSE SOLENNELLE<DUHAUPAS>

楽譜印刷／出版／企画デザイン

有限
会社

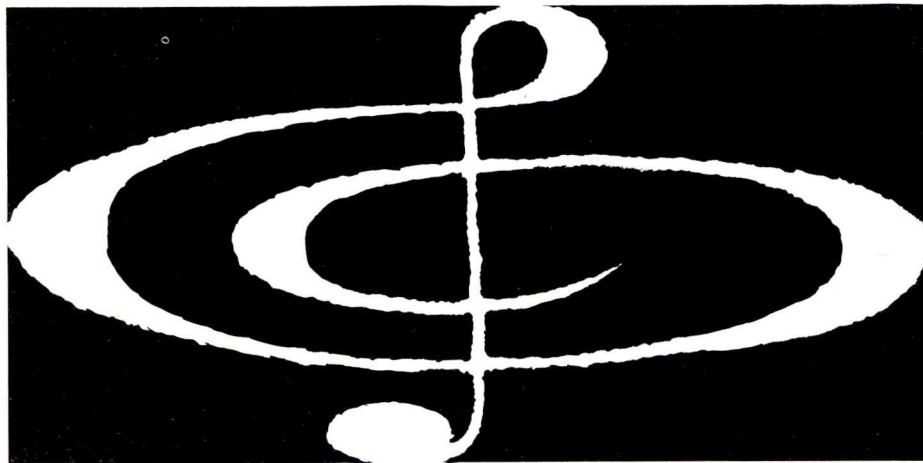
ホッタガクフ

東京都 新宿区 戸山町43の3 —
TEL341-1310・6020 振替口座東京48623

コマーシャル・フォト
スタジオ
記念アルバム
ほか……

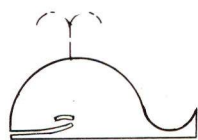
TEL 943-3681
文京区目白台2-13-4

より豊かに より楽しく——

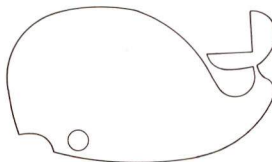


モービルは輝かしい未来をつくれます

Mobil
モービル石油



を聞いて



を喰べよう

◇名物料理 尾の身さしみ・からあげ・すき焼・げいじすかん鍋

◇御家族連れ・団体様歓迎

くくじら料理専門店> 元祖くじら屋

渋谷大映通
TEL (461) 9145

鞆・ハンドバッグ・旅行ケース専門店

Ⓢ シマダ鞆店

日信販加盟店

東京都台東区上野中通り2-2

TEL (831) 4512

この広告御持参の方に割引販売いたします



ペプシがなければ はじまらない!!

PEPSI コーラはペプシ